

2019年西神教会平和主日礼拝（イザヤ書2章1－5節）

「剣をすきに、槍を鎌に打ち直せ」

2019年8月11日

弓矢健児

<序>

今週8月15日、日本の国は、敗戦後74年の時を迎えます。先週の8月6日には広島原爆の日、8月9日は長崎原爆の日でした。戦後74年という時を、私たちは一体どのように歩いて来たのでしょうか。

皆さんの中には、先の戦争を体験して、その後の74年を歩いて来られた方もいるでしょう。しかし、私もそうですが、戦後に生まれ、「戦争」を体験しないで歩いて来た人の方が今や多くなっています。もちろん、戦争を体験したことが無い世代が増えているということは、この間、日本は戦争をしてこなかったということですから、そのこと自体は素晴らしいことです。しかし、だからと言って、戦争を体験していないから、「戦争を知らない」、と言ってもよいのでしょうか。

体験していないということと、知らないということは違います。体験してなくても、知ることはできます。逆に体験していても、それが正しい歴史認識となっているとは限りません。ですから、戦争を体験した者も、していない者も、あの戦争の実態と悲劇の現実を正しく知るように努めていくことが必要です。そして、そのことを次世代の者たちにもまた伝えて行くことが必要です。

先日の「長崎原爆の日」に田上長崎市長が読んだ、長崎平和宣言のメッセージがとても強く心に響きました。新聞等にも平和宣言の前文が掲載されていますので、読まれる方もいらっしゃると思います。その宣言の中で次のような言葉がありました。

「原爆は「人の手」によってつくられ、「人の上」に落とされました。だからこそ「人の意志」によって、無くすことができます。そして、その意志が生まれる場所は、間違いなく、私たち一人ひとりの心の中です。」

戦争の根は私たちの心の中にあります。それが罪人の現実です。だからこそ、私たちは心の中に平和の種を蒔いて行かねばなりません。そうしてこそ、私たちの心には平和への意思が生まれます。そして聖書は、その平和の種こそが、神の愛と平和であ

ることを教えています。だから、私たちは聖書の御言葉を通して、神の愛と平和の意思をしっかりと受け止めていかねばなりません。また、真の平和の実現のために、神は今何を私たちに求めているのかをしっかりと聞いて行くことが大切です。

本日の平和主日礼拝では、先程朗読しましたイザヤ書2章1－5節の御言葉を通して、そのことを共に聞いていきたいと願います。

< 1：戦争の脅威の中で与えられた終末のビジョン >

まず1節をご覧ください。「アモツの子イザヤがユダとエルサレムについて幻に見たこと」とあります。このイザヤ書2章は、主なる神が預言者イザヤに対してお示しになった幻、ビジョンです。イザヤが、この幻を神から与えられた時代は、イスラエルの国がアッシリア帝国の軍事的脅威にさらされていた時代です。イザヤが生きた時代は、紀元前700年代ですが、紀元前722年には北イスラエル王国は、アッシリア帝国によって滅ぼされてしまいました。そして、イザヤが住んでいた南ユダ王国も、このアッシリア帝国の軍事的脅威にさらされ、国内の政治は非常に混乱していました。

こうした戦争の脅威と不安の中で、イスラエルの為政者たちの多くは、アッシリアの軍事的脅威から国を守るために、当時の大国であったエジプトと軍事同盟を結んで対抗すべきだと考えたのです。政治的・軍事的常識から考えるならば、確かに現実的な政策であると考えられました。神はそのようなイスラエルの状況の中で、預言者イザヤを通して、この幻、このビジョンをお示しになったのです。

それならば、神はどのような幻をイザヤに示されたのか。神はアッシリアの脅威からイスラエルを守るための、すぐにでも役立つような政策をお示しになったのでしょうか？ そうではありません。

2節をご覧ください。冒頭に「終わりの日に」とあります。つまり、これは終末に関する神の預言です。神は、終末の時に世界はこうになるという幻を、イザヤにお示しになったのです。神はアッシリアの脅威にさらされ、不安のただ中にあるイスラエルに対して、終末のビジョンをお与えになったのです。そして、続けてイザヤは次のように語ります。2節の続きです。「主の神殿の山は、山々の頭として堅くたち、どの峰よりも高くそびえる」とあります。

この「主の神殿の山」とは、直接的にはエルサレムを指しています。しかし、ヨハネの黙示録では、終末における「神の国」が、「新しいエルサレム」と呼ばれているこ

とから、ここではイスラエルの都であるエルサレムを指すだけでなく、終末における神の国そのものを表していると考えられます。そして、そうした神の国を意味する「**主の神殿の山**」が、「山々の頭として、どの峰よりも高くそびえる」というのです。これは神の国が、この世界において完成し、最高の栄光を輝かせていることを表しています。つまり、ここで示されている幻は、終末の時、神のご支配が完成し、神の正義と平和による新しい世界の秩序が、この世界に完全に実現するという約束なのです。そのことは2節の最後から3節で、「国々はこぞって大河のようにそこに向かい、多くの民が来て言う。『主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主は私たちに道を示される。私たちはその道を歩もう。主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る』」とあることから分かります。

神の国が到来した時には、イスラエルだけでなく、世界のすべての民が、主なる神のご支配の中で、主の御言葉を信じ、主の御言葉が指し示す道に従って歩むようになるというのです。しかも、彼らは決して強制されて従うものではありません。3節では、「私たちはその道を歩もう」とあります。世界の民は、自分たちの自由な意思によって、主の御言葉に服従し、主の道を歩むようになるのです。

＜2：終末において実現する完全な平和＞

そのような神の国が地上に実現する時、この世界に一体、どのようなことが起こるのでしょうか。その事が4節に示されています。4節をご覧ください。

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」

イザヤは、戦争も戦争の道具も廃絶された平和な世界の到来について預言しています。その時人々は、戦争の道具である剣や槍を、農業の道具である鋤や鎌に打ち直すというのです。現代の言葉で言い換えるならば、ミサイルや戦車や戦闘機と言った武器を廃棄し、その技術を人間の命を育む産業に転換して行くということです。そのようにして、世界の国々は軍事力を放棄し、戦争を放棄し、二度と戦争をすることを学ばない。むしろ、互いに愛し合うこと、助け合うことを学ぶようになる。これが、聖書が私たちに約束している終末における神の平和です。

平和のことをヘブライ語でシャロームといいます。この言葉は、本来、全体性や完成を意味する言葉です。つまり、シャロームは、単に人間の心の中だけの問題ではなく、

神が創造なさったこの世界全体の回復と完成という出来事と深い関係があるのです。この世界に真の正義と公平が実現し、神の愛に満たされた世界が実現する、そこにおいて、神と人間との間の、人間と人間との間の、そして人間と他の被造物との間の正しい関係が回復する、それが神の平和、シャロームです。

しかし、ここでイザヤが預言しているような世界、戦争も武器も完全に廃絶され、すべての人が互いに愛し合って生きる平和な世界は、クリスチャンでない人からするならば、現実からかけ離れた理想だとか、空想的平和主義だと言われてしまうかもしれません。また、ともすると、私たちクリスチャンも、これは遠い将来の終末の時のことだから、今の現実にはそぐわない、ここで言われている御言葉は、終末以前の今の世界には適用できない、と考えるしまうことがあるのではないのでしょうか。確かに、今はまだ終末の完成の時ではありません。けれども、私たちは、アッシリアの軍事的脅威と不安という現実のただ中で、主があえて、この終末的平和のビジョンを、イザヤにお与えになったことの意味を考える必要があるのだと思います。

神は、「終末の時にこの世界はこうなりますよ」、という未来の計画をここで語っておられるだけではありません。そのことは5節の御言葉からも分かります。そこでイザヤは、「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」と呼びかけています。つまり、この御言葉から私たちが教えられることは、4節で示された「終末的平和のビジョン」は、この今という時に、私たちが歩むべき新しい生き方の指針としても示されているということなのです。

どんなに、今の現実が、神の平和から遠く隔たっているように見えても、また、どんなに現実の世界が軍事力によって支配されているように見えても、私たちはそういう闇の現実に従うのではなく、主の光の中を歩むことが大切なのです。つまり、主が私たちに示して下さった「終末の平和」という希望の中で、この希望に向かって、この今と言う時を生きることが、私たちに求められているということです。

確かに、平和の問題も含めて、現実の社会の問題は、それぞれの時代や状況と深く関係しています。したがって、単純に聖書から、「こうこうですよ」と、直接答えがでるものばかりではありません。むしろ、そうではないことも多くあります。「戦争と平和」の問題もそうだと思います。しかし、それでも聖書は、私たちがどこに向かっていくべきか、そのためにどのような努力をしていくべきか、ということに関しては、はっきりとビジョンを語っています。その方向性を私たちに教えてくれているのです。

今の私たちの世界には戦争や暴力があります。軍事力によって支配されている現実を目の当たりすることがあります。人々を戦争へと導こうとする様々な政治的な力があります。けれども、そもそも人間は戦争するため、殺しあうために、神によって造られたものではありません。人間が神の形として創造されたのは、私たちが神の愛の中で互いに愛し合い、平和に生きるためです。そうである以上、私たちは、今の世界の現実を無批判に肯定してはなりません。なぜならば、このイザヤ書において約束されている終末の平和は、既に主イエス・キリストの到来によって、そして主イエスの十字架と復活によって、始まっているからです。

使徒パウロはそのことをコロサイの信徒への手紙1章20節で次のように語っています。「その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」

預言者イザヤがイスラエルの民に、この終末的平和の幻を語り、それに向かって歩みだすようにと勧めた時以上に、今私たちキリスト者は、終末の近くにいるのです。「神の国はあなたがたのただ中にある」とおっしゃったイエス・キリストにおいて、この終末の平和は、既に私たちの現実の中に入り込んで来ているのです。そうである以上、私たちは、「戦争すること、軍備を強化することが当たり前だ」という世の現実に対して、むしろ、別の現実を立てて行くことが求められています。すなわち、本日のイザヤ書2章4節に記されている、「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」という終末的平和の幻こそ、新しい現実として、この世に対して語っていくこと、また、その完成のために努力をして行くことを、主から求められているのです。

イザヤが語る終末の平和は、決して、私たち人間の理想や願望ではありません。「戦争や軍備など無い、平和な世界が来ればいいナー」という夢ではありません。そうではなくて、このイザヤの預言は、平和のビジョンは、神が私たちに約束してくださっている終末の現実なのです。

<結論>

敗戦後74年、今日本の国は、再び海外で戦争をする国になるか、どうかという歴史の岐路に立たされています。そうである以上、私たちはこのイザヤの語る平和の預

言にしっかりと心を傾け、平和への道を決断して行くことが求められています。

①日本の国が二度と戦争の過ちを繰り返すことがないように、②教会も戦争に加担した過去の過ちを繰り返すことがなく、しっかりと見張りの務めを果たしていくことができるように、③そして、アジア近隣諸国との真の和解が少しでも進展していくように、私たちは主イエスの平和にかたく立って、祈り、語り、そして行動していく者でありたいと願います。 祈りましょう。

<祈り>

主イエス・キリストの父なる神様。

あなたは預言者イザヤを通して、この世界に完全な平和を来たらせてくださることを約束してくださいました。今だ、この世界には多くの戦争や暴力が存在しています。しかし、あなたはそういう現実の中でこそ、私たちが主に信頼し、主がお示しくくださった主の光の中を歩むようにと励ましてくださっています。

どうか、この世界が戦うことを学ぶのではなく、和解と平和に生きることこそ、学ぶことが出来ますように導いてください。そのためにも、私たちの心に平和への意思と勇気を与えてください。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。